互いが認め合う豊かな学級づくり

―学級通信・学級活動の実践を通して―

教育実践研究科　教職実践専攻　教職実践基礎領域
藤井啓康

Ⅰ　はじめに

私が教職大学院に入学した理由は、大きく２つある。

１つ目は、小学校教師になる想いが強くあるためである。私は小学校卒業式の時、いつか小学校教師になりたいと抱負を語った。私はその時の思い出から、子どもが夢や希望を持つことができるような教師になりたいと感じていた。そのため、小学校免許を取得できる魅力があったためである。

２つ目は、教職に就く前に教師としての自信をつけたいと感じたからである。大学が、教育学部ではなったことから、教育に関する知識や専門性が十分とはいえず不安を感じていた。そして、初めての教育実習では挫折を感じ、教職に就く自信を失ってしまった。しかし、小学校からの夢を諦めたくはなく、教職大学院に進学し、自分自身を見つめ直し、磨きたいという気持ちがあった。

教職大学院での学びは、学級経営や授業力の基礎的・基本的な知識を理論的に学び、模擬授業を通して実践的に学ぶことができた。そして、学校サポーター活動と教師力向上実習を通して、生涯にわたり、教職生活を行っていく上での教師としての技術や自信を培うことができ、私の大きな財産となった。

Ⅱ　実習テーマ設定の理由

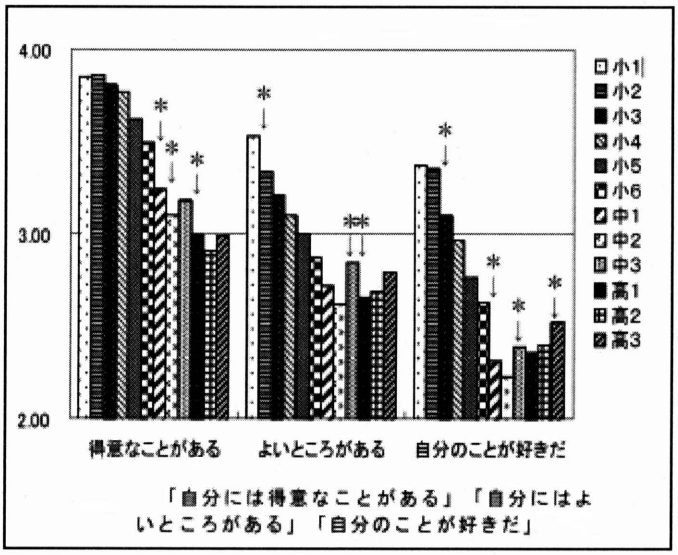
１．学校サポーターを通して見た子どもの実態

私は、学校サポーター活動をみよし市立Ａ小学校で行った。教師力向上実習Ⅰ・ⅡもＡ校で行った。

１年次の学校サポーターでは、１年生から６年生までの全学年全クラスの子どもと関わることができた。Ａ校の子どもは朝や帰りのあいさつ、毎時間の号令など元気いっぱいなところが見られる。しかし、子どもを観察すると特定の仲間としか関わることができない様子も見られ、どの仲間とも仲良く関わることができたらいいなと感じるところが見られた。例えば、自分の考えを押し通し、友達同士でけんかが起きることや、自分の思いを上手く表現できず不満を抱える様子が見られ、このことから、子ども同士、互いの存在を認め合い思いやりのある豊かな子どもを育むことが大切であると感じた。

２．社会的背景から

中央教育審議会の答申[i]では、「第２章　青少年の意欲をめぐる現状と課題」の中で、青少年の様相とその原因として、「意欲を行動に移す段階でのつまずき」を挙げ、「意欲を持っているが、行動することへの負担感が大きいなどの理由により、意欲を実現するための行動に移せず、行動する前にあきらめている」、「意欲を持っており既に行動したが、失敗したこと等による徒労感、絶望感から抜け出せず、改めて挑戦しようとする意欲を持って行動できない」と述べている。下記のグラフは、東京都教職員センターの調査からの「自尊感情や自己肯定感に関する研究[ii]」で結果がある。



この調査結果からわかるように、自尊感情は小学校から中学校１年生まで次第に低下し、中学校３年生で上昇し、高校で再び低下する傾向がある。また、(財)日本青少年研究所における「高校生の心と体の健康に関する調査[iii]」では、日本・米国・中国・韓国の４カ国の高校生男女約7000人を対象にした調査で以下のような結果がある。

○私は価値のある人間だと思うか。

	米国	中国	韓国	日本
そう思う	57.2%	42.2%	20.2%	7.5%
まあそうだ	89.1%	87.7%	75.1%	36.1%

○自分に満足しているか

	米国	中国	韓国	日本
全くそうだ	41.6%	21.9%	14.9%	3.9%
まあそうだ	78.2%	68.5%	63.3%	24.7%

○自分が優秀だと思うか。

	米国	中国	韓国	日本
全くそうだ	58.3%	25.7%	10.3%	4.3%
まあそうだ	87.5%	67.0%	46.8%	15.4%

この調査からもわかるように、どの項目からも日本は他国よりも劣っており、日本の高校生は自尊感情に乏しく、ネガティブな自己像を抱き自己肯定感の低さが際立っている。

以上のことから小中学校教育の中で低下する自尊感情、自己肯定感を育むことは大切であり、教科外活動の重要性が感じられる。私は、小学校教育の中で自己肯定感や自尊感情を育むために、互いの良さも気になるところも話し合いが行うことができ、共感し、違いを解決することができることであると考え主題テーマを設定した。

Ⅲ　学級通信・学級活動の実践を通して

1．学級の実態

実習は第４学年と関わらせていただいた。子どもを観察すると、一部の子どもは自分本位で行動し友達同士でいざこざがしばしば起こり、泣きじゃくる子がいる。また、思いや気持ちとは反対に照れくさかったり恥ずかしがったりと上手く言葉で相手に表現できない課題が見られた。このことから、子どもは表現する力はあるのだが、集団生活の中で周りと違った考えだから不安がっているのではないか、周りから馬鹿にされるのが嫌だから表現することをためらっているのではないかと私は感じた。

このような子どもの様子から実習のねらいは以下のように設定した。

・子どもたちが学級の仲間に興味関心を持って生活できるようにする。
・日常生活の中の事象に広く感動できる豊かな心を育てる。
・友達の長所や短所を認め会い、学級への所属感を高める。
・自己肯定感を高め、他者を思いやる心を育む。

2．実習の記録

【ア】学級通信

① 学級通信のねらい

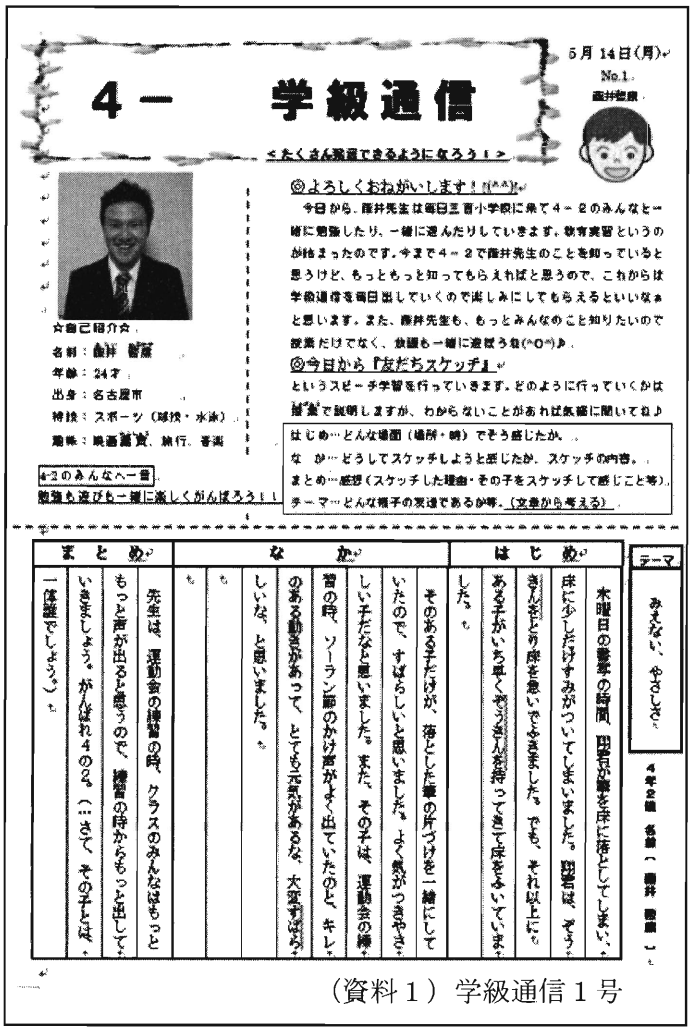
・子どもにとって学校での様子の中で、よかったところを取り上げ、通信として発信することで自己肯定感を感じ取ってもらうこと。
・日常生活の中で関わる事象から感動できる豊かな心を育むこと。

教師力向上実習Ⅰにおいて学級通信を毎日発行した。発行することで教師自身の考え方や思いを理解する態度を育み、教師から子どもへの熱意を子ども自身に感じ取ってもらいたいという思いがあった。

② 実習の内容

（第１週目）

実習初日に、私の第１号を発信した。（資料１）



５月 14日(月)
No.1
藤井聖貴

4－　学級通信

＜たくさん発言できるようになろう！＞

◎よろしくおねがいします！(^^)

今日から、藤井先生は毎日三吉小学校に来て４－２のみんなと一緒に勉強したり、一緒に遊んだりしていきます。教育実習というのが始まったのです。今まで４－２で藤井先生のことを知っていると思うけど、もっともっと知ってもらえればと思うので、これからは学級通信を毎日出していくので楽しみにしてもらえるといいなぁと思います。また、藤井先生も、もっとみんなのこと知りたいので授業だけでなく、放課も一緒に遊ぼうね(^O^)

◎今日から『友だちスケッチ』

というスピーチ学習を行っていきます。どのように行っていくかは黒板で説明しますが、わからないことがあれば気軽に聞いてね♪

☆自己紹介☆
名前：藤井 聖貴
年齢：24才
出身：名古屋市
特技：スポーツ（野球・水泳）
趣味：映画鑑賞、旅行、音楽

はじめ…どんな場面（場所・時）でそう感じたか。
なか…どうしてスケッチしようと思ったか。スケッチの内容。
まとめ…感想（スケッチした理由・その子をスケッチして感じこと等）。
テーマ…どんな雰囲気の友達であるか等。（文章から考える）

4-2のみんなへ一言
勉強も遊びも一緒に楽しくがんばろう！！

テーマ：みえない、やさしさ。

はじめ：木曜日の書写の時間、Ｍ君が筆を床に落としてしまい、床にインクだけすみがついてしまいました。Ｍ君は、そうじをとり床を急いでふきました。でも、それ以上にある子がいち早くぞうきんを持ってきて床をふいていました。

なか：そのある子だけが、落とした筆の片づけを一緒にしていたので、すばらしいと思いました。よく気がつきやさしい子だなと思いました。また、その子は、運動会の練習の時、ソーラン節のかけ声がよく出ていたのと、キレのある動きがあって、とても元気があるな、大変すばらしいな、と思いました。

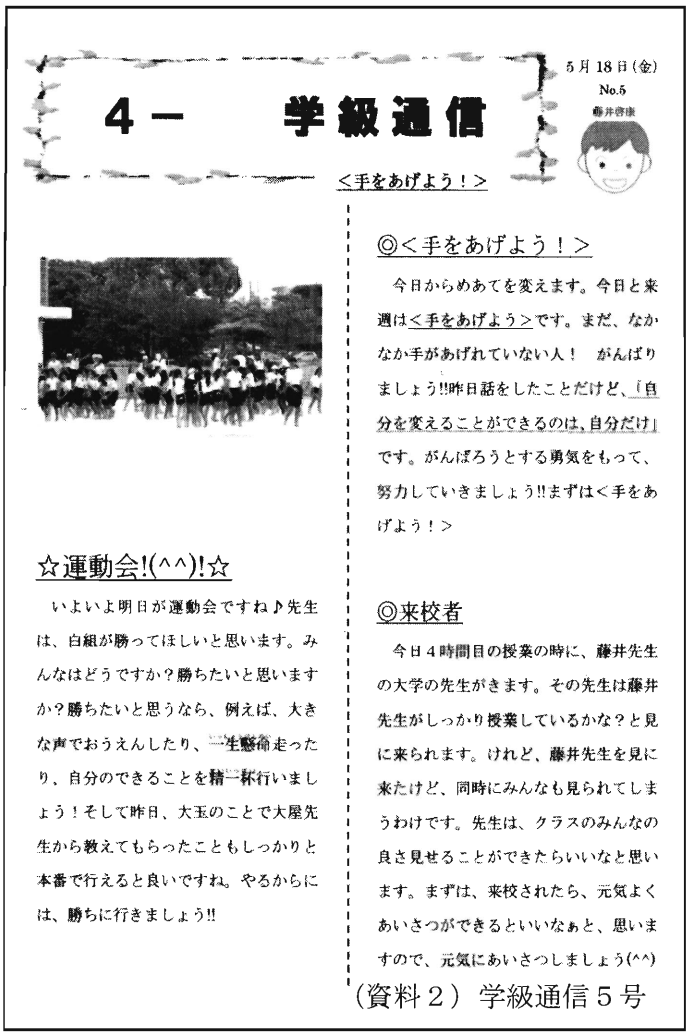
まとめ：先生は、運動会の練習の時、クラスのみんなはもっともっと声が出ると感じるので、練習の時からもっと出していきましょう。がんばれ４の２。（…さて、その子とは、一体誰でしょう？）

（資料１）学級通信１号

第１号は私の実習が始まることを伝えるとともに、子どもたちに私が行っていく、スピーチ学習「友達スケッチ」のモデルスピーチを記載した。第１日目に載せたモデルスピーチをみた子どもの中には、「こんな大人っぽい文章、書く事ができないよ。」「むずかしそう」という少し批判めいた言葉が見られた。次に、タイトル「学級通信」の枠の中に、サブタイトル「たく

さん発言できるようになろう！」という言葉を記載した。サポーター期間の時に、授業や意見を発言する際、いつも決まった子どもしか発言することがなかったので多くの子が発言してほしいという私の気持ちがあった。

次に、実習第１週目は運動会が行われたため、２日目以降、通信には子どもが学校生活における運動会の様子を主に記載していった。（資料２）


4－　学級通信

5月18日(金)
No.5
藤井啓東

＜手をあげよう！＞

☆運動会!(^^)!☆

いよいよ明日が運動会ですね♪先生は、白組が勝ってほしいと思います。みんなはどうですか？勝ちたいと思いますか？勝ちたいと思うなら、例えば、大きな声でおうえんしたり、一生懸命走ったり、自分のできることを精一杯行いましょう！そして昨日、大玉のことで大屋先生から教えてもらったこともしっかりと本番で行えると良いですね。やるからには、勝ちに行きましょう!!

◎＜手をあげよう！＞

今日からめあてを変えます。今日と来週は＜手をあげよう＞です。まだ、なかなか手があげれていない人！　がんばりましょう!!昨日話をしたことだけど、「自分を変えることができるのは、自分だけ」です。がんばろうとする勇気をもって、努力していきましょう!!まずは＜手をあげよう！＞

◎来校者

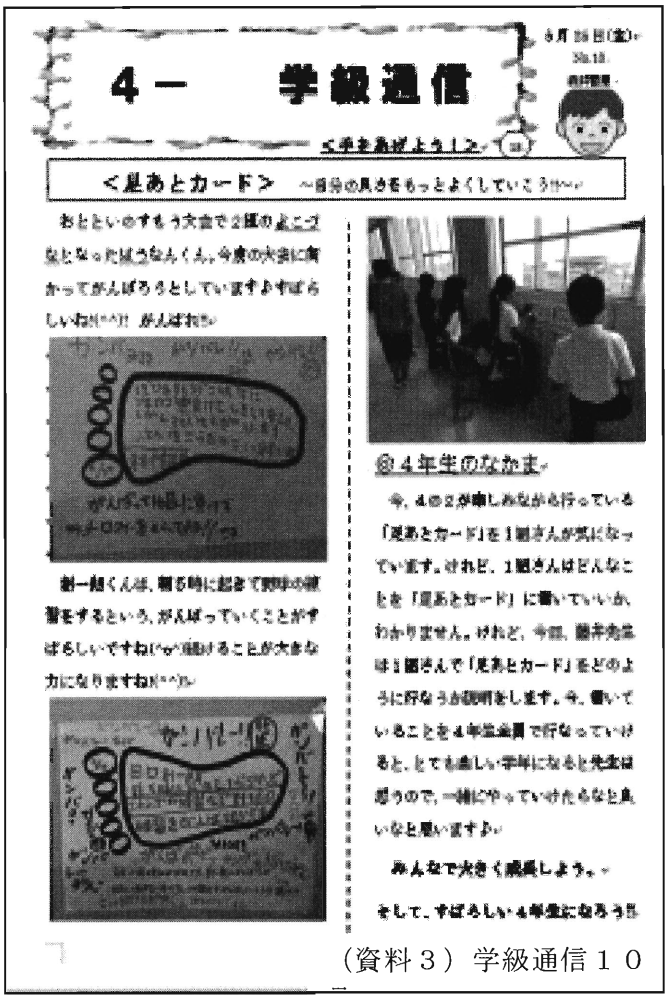
今日４時間目の授業の時に、藤井先生の大学の先生がきます。その先生は藤井先生がしっかり授業しているかな？と見に来られます。けれど、藤井先生を見に来たけど、同時にみんなも見られてしまうわけです。先生は、クラスのみんなの良さ見せることができたらいいなと思います。まずは、来校されたら、元気よくあいさつができるといいなぁと、思いますので、元気にあいさつしましょう(^^)

（資料２）学級通信５号

運動会の様子を載せた通信を発行すると「運動会絶対勝ちたい。」「やるからには精一杯頑張って勝ちたい。」「応援もしっかり声を出して頑張ろう。」といった記載した言葉が、子どもの言葉としてそのまま返ってきた。私は、その子どもからの言葉が非常に嬉しく感じ、通信を発行することで私が子どもへの思いや気持ちが伝わったと実感することができた。

（第２週目）

第１週目最終日に、イチロー選手の言葉を引用した「確かな積み重ねも１歩から」という実践を行った。その活動を主に通信として取り上げていき、記載していった。（資料３）記載した内容は、足あとカードに書かれている内容から、子どもが現在頑張りたいことに焦点を当て、その子どもを素直に私から褒めていった。例えば、「Ａくんは野球を頑張りたいから、毎朝５時に起きてすぶりやキャッチボールを頑張っているんだね、すごいね」といったように、その子自身の現在の頑張りの活動を褒め、認めていくことを行っていった。１週間経ってから「まだ、続けているよ」といった報告があったり、「部活動でバスケットボールを頑張りたい」と書いていた子は仲良しタイムや清掃後の放課などで体育館に行き、練習したりして頑張っている様子が見られた。


4－　学級通信

＜手をあげよう！＞

＜足あとカード＞　～自分の良さをもっとよくしていこう～

◎４年生のなかま

（資料３）学級通信１０

（第３週目）

第３週目から通信に何をどのようにに発信するべきかと悩み、子どもたちが下校してから校内を歩き、私自身が関心を持つことを中心に載せていくこととした。（資料４）は、足あとカードが廊下で学年で行われている様子と、理科の授業でのゴーヤの観察、私自身が発見したバッタの孵化した様子を載せた。違う日の通信には、月の観察、木や落ち葉のことといった内容を発行していった。バッタの孵化の様子は、私自身、初めて見てたことから、とても印象的であった。学級の中で、子どもたちに「見たことある？」と聞くと「テレビや本では見たことあるけど、自分の目では見たことない」という意見がほとんどであった。発信したときは子どもの反応としてはあまり興味がなかったか

4－_　学級通信

5月30日(水)
No.13.
森井敬彦

＜手をあげよう！＞ (22)

◎＜足あとカード＞

最近、1組の子が「足あとカード」をどんどん書いている様子が見られますね!(^^)!　2組の子もたくさん書けて、すばらしいなと思います♪

4学年の全員で、一緒に勉強もスポーツも遊びも生活習慣も高めていけるとすてきですね(^。^)y-。o○

これから、楽しみですね!(^^)!

☆＜発見!!!＞☆

昨日、夕方の6時ころ、こんな！生き物を発見しました!!　なんだろうね??

答えは、ふかしたばかりのバッタたちでした（*^_^*）初めて先生はこのようなしゅんかんを見ましたのでビックリしてとてもこうふんしました。正直言って、なんか気持ち悪かったかな(*_*)　発見した場所は、北舎の建物の西側のカベの近くで、ウジャウジャして出てきました。生まれたばかりは白いんだね。画像が気になる子は、教室の後ろのカラーの通信を見てね(^o^)

（資料４）学級通信１３号

のように思えたが、後日、運動場ですもう大会が行われたときに女の子達が「バッタの孵化したところってこのあたりだったんだよね？」という反応があった。発行した当日は、あまり関心を持つ子や大きな反応を見せる子は多くはなかったが、子どもの心には届いているのだと感じられた。

（第４週目）

第４週目は、特に何を載せていったいいかとても悩み、２週目から続いた足あとカードを載せて子どもを褒めていったり、級訓をみんなで作ったのでそれを載せたりした。

４週間の通信を続けて、子どもの成長として大きく変わったことは手をあげる子が増えたということが特に感じられた。通信の題名の項目に第１週目では、「たくさん発言できるようになろう！」、第２・３週目では「手をあげよう！」と、子どもへ促していった。第４週目では子ども自身に「どんな言葉を載せようか？」と聞き、「教室は間違えるところだ、だから手をあげよう！」と決まり、算数の簡単な問題から、多くの子どもが手をあげるようになった。教師から子どもへと通信を使って、教師の考えや思いを毎日発信し続けることで、少しずつ子どもの変化が感じられた。

③　学級通信活動の成果

山田暁生氏は『学級づくりと「学級通信」活動[iv]』の中で「学級通信」の具備する条件とは、「第一に発行する教師の個性がにじみ出ること。第二に子どもたちの姿を生き生きと伝えること。第三に親とともに、子ども・教育の問題を考えあえる内容であること。」の３点が大切であると述べている。今回の実践では、主に第二の子どもたちの姿を生き生きと伝えていくことができたことで、実習後に行われた授業参観の際、保護者から「子どもから先生のお話を良く聞きます。通信に僕のことが褒められたと言って喜んでいました。」という話を聞いた。子どもは、その場で喜ぶ子もいれば家庭に帰ってから保護者の方に報告して喜ぶ子もいるのだと感じて、毎日通信を発行するのはとても大変であったが、発行する意義が感じられた。

④　学級通信活動のこれからの課題

教師力向上実習Ⅰ・Ⅱを通し、教師の仕事の多さというのを改めて痛感した。教師力向上実習Ⅰでは、普段から算数の授業をさせていただいき、主に学級づくりとして学級活動や道徳について実践を行わせていただいた。そのため、毎日子どもの活動の様子を細かく観察することができ、学級通信を発行するのに参考になった。しかし、教師力向上自習Ⅱでは思うように通信を発行することができなかった。それは、子どもの活動を十分に観察することができなかったためであると反省する。通信によって、子どもの活動や子どものよさを発行するということは、教師自身が子どもを理解することができるきっかけであるので、教員生活が始まって毎日できるだけ欠かさず続けていきたいと思う。通信の書き方として、学ぶべきことがたくさんあった。以下、私の反省点と課題、疑問点をあげる。

- 子どもが何を目指してどのように頑張っているか具体的に褒めることが大切であった。（足あとカードの枚数を褒めて、中身を十分に褒めることができていない）
- 学校での様子を伝える報告になっている。
- 算数や社会、理科など多くの要素を入れ、毎日変わる内容であったので、何を伝えるのかわからなく一貫性がない。
- 私自身の自己満足ではないかと感じるところがある。

【イ】　足あとカード

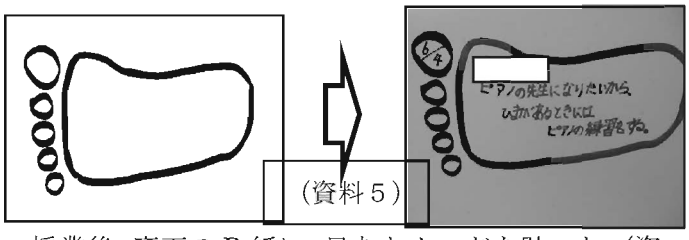
①　足あとカードのねらい

- 子どもたちに今できる「一歩」が未来に続いていることを知り、自分自身を高めていこうとする思いを持つこと。
- 子ども同士かかわり合いを持ち、友達の言葉を励みとして心に持つことができるようにすること。

② 実習の内容

（第１週目）

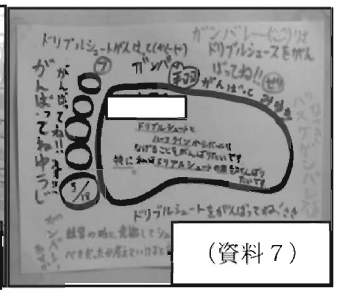
１週目の金曜日、学級活動の時間でイチロー選手の言葉から、「確かな一歩の積み重ねでしか、遠くへは行けない」を用いて日々努力を重ねるこる大切さを学ぶことを理解する授業を行った。「頑張りたい自分・なりたい自分」という自分の近い未来に対して「今何をどのように頑張るか」を（資料５）のように、カードに書かせていった。



（資料５）

授業後、廊下のＢ紙に、足あとカードを貼った。（資料６）そして、机の上に足あとカードの紙とペンを置いて放課中いつでも書く事ができるようにした。

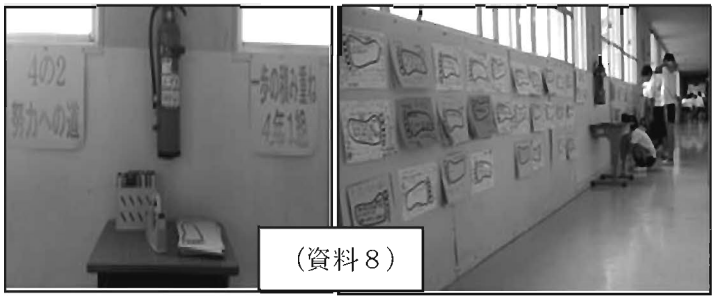
（資料６）


（資料７）

すると、子どもたちはすぐに友達がどんなことを書いたかを足あとカードに書いていき、友達にメッセージを送っていった。（資料７）からわかるように子ども同士が友達の頑張りを認め合い、「がんばって」という言葉でうめつくされた。

（第２週目）

廊下に掲示してあることから他学級の子が何を行っているか見に来た。私が「どうしたの？」と聞くと「楽しそうにやっているから何をやっているのか気になった。」ということだった。このことから、他学級でも同じ授業を行わせていただき、学年での活動になった。２学級であることからクラスの間に机を置き、１組では「一歩の積み重ね」、２組では「努力への道」というタイトルを子どもの意見から決めて実践を進めた。（資料８）は子ども活動と様子である。


（資料８）

（第４週目）

第３週目での足あとカードの実践の経過から、第４週目に日常の活動の手立てとして、振り返りを行わせたいと考えた。振り返りは、「自分の足あとをみてどのように感じたか」という簡単な感想を書かせた。以下、子どもが書いた実際の例を挙げる。

T 君：ピッチングがんばって、ヒット打てるとすごいという言葉がうれしかった。早くけがを治すようにたくさんご飯を食べて気をつけていこうねって書かれていてうれしかった。

M さん：一緒にがんばろうねって言われて友達とがんばっているようでうれしい。学校の先生になるために予習、ふく習がんばってねと言われてうれしかったです。

O さん：ドリブルシュートがんばってねというのがうれしかったです。

G さん:わすれもの０がんばれ!!おうえんしているよってがんばらなくちゃと思った。

このように友達同士で言葉のつながりを持ち、互いの頑張りを認め合い、褒め合っていく活動を通して自己肯定感を感じることができたのだと思われる。「足あとカード」の実践は、実習中が特に子どもたち自身楽しそうに活動し、夏休みが開けると同時に徐々に活動がなくなっていった。このことは、私が「足あとカード」に対して十分な働きかけを行わなかった点や子どもたちが「足あとカード」に対して興味がなくなってしまった点が挙げられる。しかし、学芸会やマラソン大会といった行事がある際に担任の先生方が「足あとカード」を配布し、子どもが学校生活の中でがんばっていくことを書いていった。

③ 「足あとカード」の成果

・つながることのきっかけができたこと。

担当学級の中に外国籍の子がいる。その子はあまり日本語で友達と関わることをせず、カタコトの日本語やジェスチャーを使って友達とコミュニケーションを図るが周りの友達とは上手くつながりを持つことができていなかった。しかし、「足あとカード」の実践を行い、外国籍の子が友達と「足あとカード」を通して関わることができたのが大きな成果であった。そして、子ども同士が友達の頑張りを自らが感じとることができ、「うれしかった」という言葉がでてきたというのは、つながりを築けたというとても大切なきっかけである。

・学級から学年につながったこと。

はじめは担当学級で行う予定であった。しかし、廊下に掲示したことから他学級の子どもが興味を持ったことがきっかけとなり、学年全体で他者と異なる頑張りを共感し、認め合うつながりを築くことができた。

・担任の先生方が引き継いで頂けたこと。

本来、私から子たちたちへ行うことであるのだが、学芸会やマラソン大会等の行事に、担任の先生方から子どもへ伝えて頂いた。担任の先生方に心から感謝申しあげるとともに、私が行った活動が子どもと担任の先生とのつながりを持つきっかけとなることができた。

足あとカードを行い、このような活動から「きっかけ生み出す活動」を設定することが友達の良さに気づき互いに認め合っていく大切な要素であるとわかった。

④　「足あとカード」の課題

・学級活動は途中で一回区切ることが意味のあることだと学んだ。子どもたちが活動に飽きがきてしまい、後期から子どもたちの活動意欲がなくなってしまったことがあげられる。

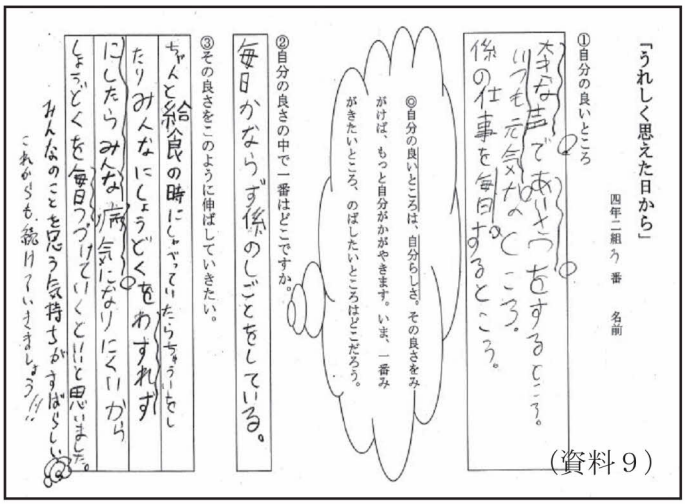
【ウ】道徳

A校では、道徳の研究に力を入れており授業実践を行わせていただいた。実習中、小学校学習指導要領解説道徳編を執筆された大学教授にもご指導いただいた。

①　（第１回目）

主題：うれしく思えた日から （中１－（５）自分のよさ） 資料：「小学校道徳　読み物資料集（文部科学省）」

授業では、自分の特徴に気付き、良いところを伸ばそうとする態度を育てることをねらいの価値とした。下記は子どもに配布したワークシートである。（資料９）



（資料９）

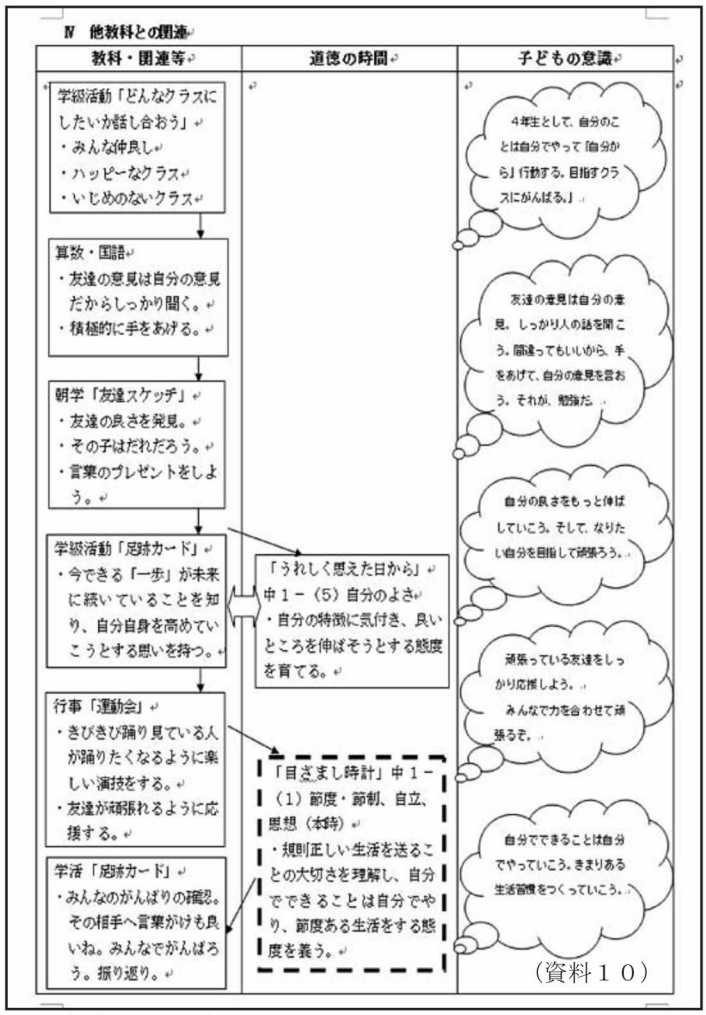
このワークシートの中から反省がある。本時の授業で身につけさせたい道徳的価値を教師の言葉で補うことはとても大切なことである。しかし、できれば子どもの中からださせたいことであるのだが、このワークシートではあらかじめ授業のポイントとなるところを書いてしまったことを反省として学んだ。また、道徳の授業では正しいという判断に子ども自らが気づくことが大切であり、机間指導では教師が線を引き○をつけることが子どもの道徳性を育むことではないということをご指導いただき学ぶことができた。

次に授業での説話のから、「今足あとカードをやっているよね。自分のよいところをもっと伸ばしていこう。」と語ったが、本時の価道徳的価値から無理に学級活動で行っている足あとカードにつなげる必要はなかったと反省する。

②　（第２回目）

主題：目ざまし時計 （中１－（１）節度・節制、自立、思想） 資料：生きる力　（日本文教出版）

授業では、主人公の行動を通して、規則正しい生活を送ることの大切さを理解し、自分でできることは自分でやり、良く考えて行動し、節度ある生活をする態度を養うことをねらいの価値とした。また、本時は研究授業として行い、教科との関連を書いた。（資料１０）



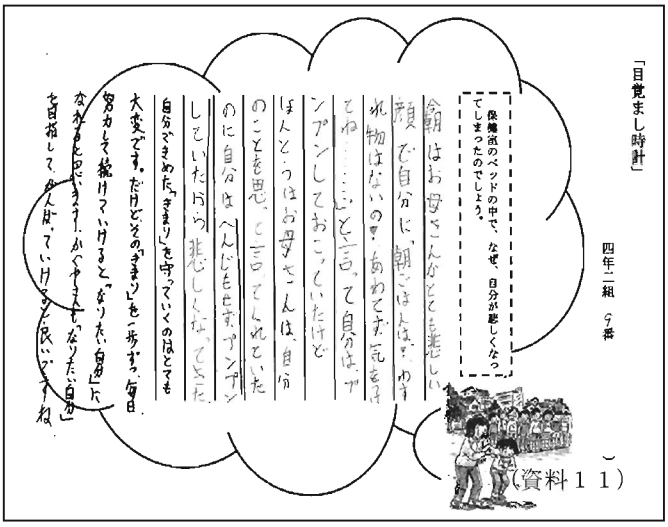
（資料１０）

教科との関連を明記することで、現在の子どもの実態を確認することができ、子どもの意識の変容を考え

ることで道徳での授業の深化があるのだとわかった。

授業の説話では「自分で決めたことは意識して行います。今、足あとカードに今頑張っていること、つまりわたしのきめていることを書いています。例えば、〇〇さんは給食を早く食べることを頑張っているよね。意識して続けていくことが大切だね。」と、子どもが行っている活動である足あとカードにつなげた。

１回目の反省点を踏まえ、ワークシートは主発問から道徳的価値に迫り、子どもの意見から道徳的価値への一般化を図るように心がけた。（資料１１）



（資料１１）

③　道徳実践の成果

「足あとカード」における実践活動やスピーチ活動による「友達スケッチ」と道徳での授業を関連させることができ、子どもは「自分のよさ」を自ら学ぶことができた。道徳とは、子どもの学校生活全体の要として、学級活動におけることや学校行事、各教科と関連させることでさらに成果につながることがわかった。道徳の授業を通して、教師が話す説話を通して子どもに深い感銘を与えることができる。言い換えると、教師の人間性がにじみでないと子どもの心情に訴え掛けることができない。道徳の授業とは、子どもの日常生活の中から読み取り資料などから道徳的価値の一般化がとても大切であるとともに教師の説話による言葉がとても重要であることを感じた。

④　道徳実践の課題

成果の中で取り上げた、説話に課題も残る。説話ではどんなことを話せばいいのか。もちろん本時の価値に関わる説話になることは当然だと思うが、教師の生き方を示す場にもなり、正解がないことから難しい。私は、自分の体験であったり、素晴らしいと感じた人（子ども）の話であったり、私自身が感銘を受けた見方、考え方を表現することが大切であると感じ、これからの課題としていく。

【エ】インプロゲーム

①　インプロゲームのねらい

学級活動の中でインプロゲーム（即興劇）を行い、クラス全体で楽しみ、表情や身体で自分を表現することができることやいろいろな表現の仕方があることを知ることをねらいとした。

②　インプロゲームの実践の内容

以下の項目をワークスペース（特別教室）にて実践した。

①　リーダー当てっこ
②　顔の表情で相手に感情を伝える
③　顔の表情に動作を加え「声、身振り」を相手に感情を伝える
④　２人同時に振り返り、顔の表情で同じ感情を表現する
⑤　２人同時に振り返り、顔の表情と動作で相手に感情を伝える
⑥　お題を身体で表現し、言葉を使わずに伝言していく

子どもは楽しそうに友達のマネをして、身体を使って表現していった。（資料１２）は、子どもの活動の様子である。

（資料１２）

③　インプロゲームの実践の成果

このよう活動を行ったとき、授業では意欲を持つことが少ない子が楽しそうに友達のマネをした。特に印象的であったのは、日本語をあまり話すことができない外国籍の子が楽しそうに行っていたことである。このことから、人とふれあう面白さ、楽しさを伝えるゲームを行い、子どもの笑顔が見られる学級活動を行うとで、子どもの学びから楽しい学級集団とさせ、友達の良さを認め合っていくことにつながると感じた。

④　インプロゲームの実践の課題

お楽しみ会ということで、場面を切り替える時に太鼓やタンバリンを用いて、「ゲームを行っている」という感覚を持たせる工夫が必要であった。

【オ】スピーチ活動

スピーチ活動を行うことのねらいとして、自分の思いや考えを相手に「わかりやすく」伝えるために（1）キーワード（キーセンテンス）（2）文章構成を活用して「論理的な文章」を書くことが大切であることを理解し、正しく（論理的に）・豊かな（個性的に）コミュニケーションの育成を試みた。子どもの中には、自分の考えや思いを「話す」ことに抵抗を持つ子がいる。そのため、今回、学級開き後、朝の会の中でスピーチ活動を実践するにあたり、メンターの先生がリレートークというスピーチ活動を実践していた。4月当初からメンターの先生は以下の拡大紙を教室に掲示していた。

発表のしかた（話型）

意見
・ぼくは○○だと思います。どうですか。
・わたしは○○だと思います。どうですか。

つけたし
・△△さんにつけたしで、○○だと思います。
・△△くんにつけたしで、○○だと思います。

ちがう考え
・△△さんとちょっとちがって、○○だと思います。どうですか。
・△△くんとちょっとちがって、○○だと思います。どうですか。

質問するとき
※質問をするときは、自分の考えを言ってから質問する。
・△△さんに質問で、わたしは○○だと思うのですが、□□さんはどうしてそう思うのですか。
・△△くんに質問で、ぼくは○○だと思うのですが、□□くんはどうしてそう思うのですか。

掲示したことで、リレートークだけでなく普段の授業の中で「話型のように話すことができるといいね」と指導され、子どもが友達の話を聴くときの姿勢や態度が整えられていった。

◎ 友達スケッチ（実習Ⅰ）

① 友達スケッチのねらい

子どもが友達のよいところに気づくことができるとともに、自分自身の良さを友達から聴くことで理解することができることをねらいとした。

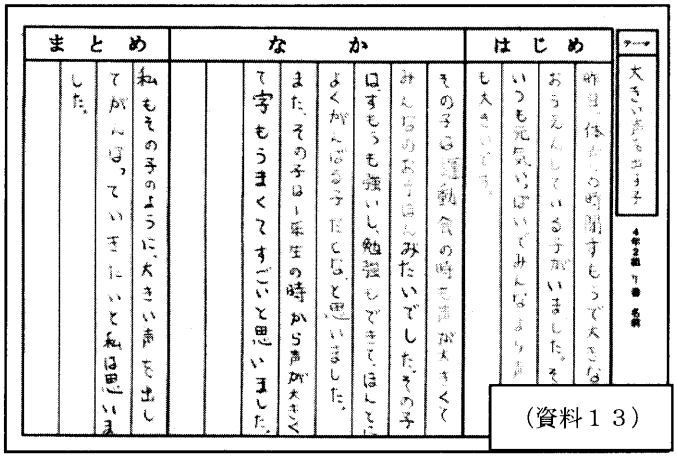
発表者のスピーチの内容を聞き手がメモをとり、気になること深めたいことを発表者に質問をさせ子ども同士の深まりあえる活動がしたいと考えている。

② 友達スケッチの内容

実習が始まると同時に、通信を通してモデルスピーチを行い、「はじめ・なか・まとめ」の3部構成でスピーチを書いていくように指示をした。モデルスピーチは第1週目の4日間通して行い、私自身子どもの良いところに目を向けていくことができた。タイトルは以下の内容を書いた。

1日目	みえない、やさしさ
2日目	さりげない、かっこよさ
3日目	ゆうき
4日目	自分から挑戦する子

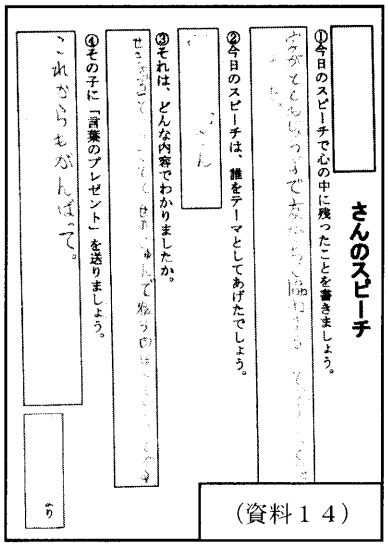
第2日目における「さりげない、かっこよさ」というとモデルスピーチを行ったところ、メンター教師から「さりげないとはどういうことか」という質問を子どもたちに向けた。私は、はじめメンター教師の質問の意味がわからなかった。それは、私自身解答する言葉を持っていなかったことや子ども自身言葉で表現することは難しいが意味はなんとなく理解できていると思っていたためである。私は実際にどのようなことか身体を使って表現し、意味は辞書を使って調べさせた。私は通信を通してモデルスピーチを書いていくことで、子どもにスピーチの書き方や表現の仕方を身につけさせたいと考えていた。しかし、私自身が書いた言葉というのは子どもにとって理解することができないものもあるのだと感じ、これからに生かしていきたいと思った。そして、2日目から一人ずつスピーチ活動を実践していった（資料13）は実際の子どもの例である。



（資料13）

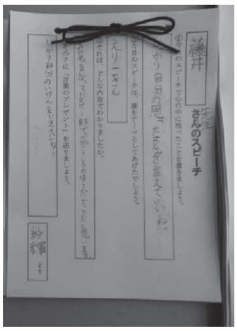
子どもの書いた原稿は、発表前に朝の空いている時間や放課を利用して確認を行った。

スピーチを行う際には、スピーチ前にスピーチメモを配布し（資料14）、スピーチを終えると同時に①「今日のスピーチで心の中に残ったことを書きましょう」を記入させた。



（資料14）

次に、どんなことが心に残ったのか意見を発表させ②「今日のスピーチは誰をテーマとしてあげたでしょう」を考えさせた。②では、スピーチの内容だけだとわからないところもあり、５つだけ質問をしてよいヒントタイムを用いた。その後、③「どんな内容でわかりましたか」、④「言葉のプレゼントを送りましょう。」を記入した。スピーチが終了したらメモは回収して、そのメモをまとめてスケッチされた子に渡した。



実践後、アンケートをとり、以下のような質問をした。

○友達スケッチは楽しかったですか。

とても楽しい	苦手
Ｋくん：その子がだれかを当てるのが楽しかった。 Ｎくん：手をいっぱいあげられるようになったし、友達のことがよくわかったから楽しかったです。	Ｅさん：文章を書いたり、発表するときに、とまったりしてちゃんと話すことができなかった。

○スピーチ文章を書くのは楽しかったですか。

とても楽しい	苦手
Ｎくん：一日中友達を観察して考えるのがとても楽しかったです。	Ｋくん：あまり書く事が見つからないから。

ここで大きな成果が挙げられたのは、Ｎくんである。Ｎくんは授業であまり手をあげることがなかった。表現意欲はあるのだが、授業だと不安を抱え表現が控えめであった。しかし、アンケートから、「とても楽しい」という項目を記入し、アンケート内容からもがんばって意見をいう姿勢が感じられるとともに算数の授業ではとてもよく手をあげるようになった。

Ｎくんのアンケートを考察すると、「文章を書く事が苦手」というよりも、友達のことをあまり観察しないというのが感じられる。このことから、他者とのつながりが希薄であったり、自分に関わりのない問題や出来事にあまり興味を持つことが少なったりするのではないかと感じられる。そのような考えを感じる子にとっても「友達スケッチ」を行い、友達の良さに気づくことが互いを認め合っていく、つながりを気づいていく大切なスピーチ活動であったと思う。

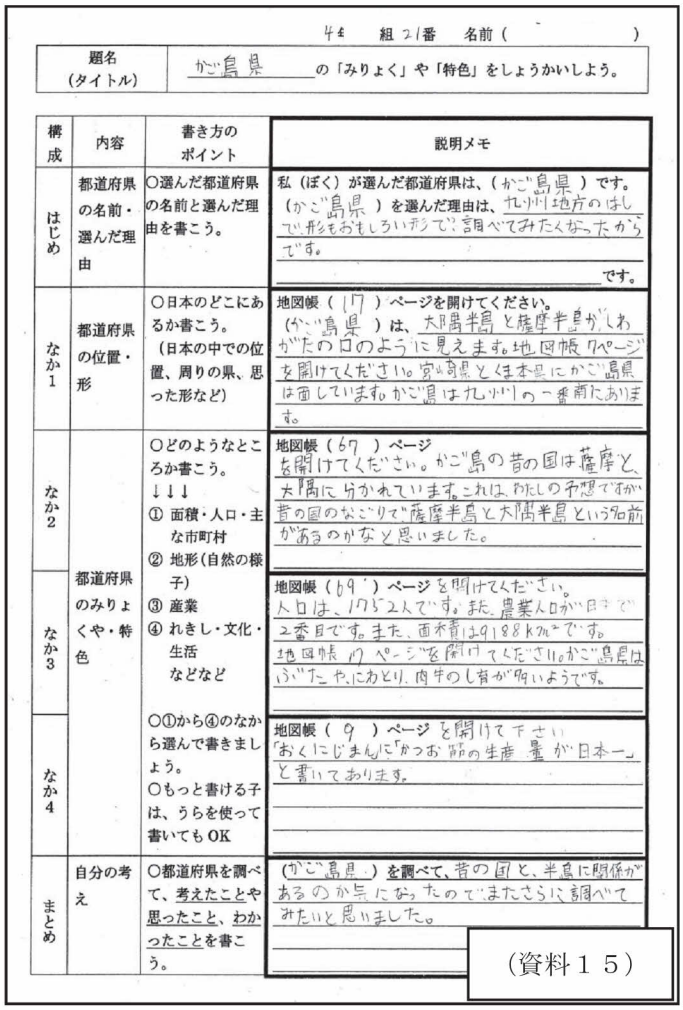
◎ 地図帳スピーチ（実習Ⅱ）

① 地図帳スピーチの実践のねらい

地図帳に書かれている言葉に着目し、県庁所在地を覚えるとともに、各都道府県はどのような形をして何が有名であるかなど、地図から社会を知ることをねらいとした。

② 地図帳スピーチの実践の内容

朝の会に行い、通信によるモデルスピーチを行った。書き方は、「書き方のポイント」を参考に「説明メモ」に記入し、基本は地図帳に書いてあることとしたが、自分で調べてきたことは書いてもいいこととした。子どもに都道府県はグループで○○地方を決め、子どもたち自身で選び発表させた。（資料１５）は子どもの例である。子どもの中には地図帳スピーチに意欲を持ち、「説明メモ」の裏へ記入したり、メモ用紙に書いてきたりする子がいた。スピーチを実際に行った後、発表者の感想を子どもに聞くと「○○くんは富山県のことをとても詳しく調べてあって、手抜きがしていない感じがとてもよかった。」「香川県が日本で一番小さい県で讃岐うどんが昔の国の名前からきているって、新しく知ることができてよかった。」と友達の良さをほめていった。



４年　組 21番　名前（　　）

題名（タイトル）	かご島県 の「みりょく」や「特色」をしょうかいしよう。

構成	内容	書き方のポイント	説明メモ
はじめ	都道府県の名前・選んだ理由	○選んだ都道府県の名前と選んだ理由を書こう。	私（ぼく）が選んだ都道府県は、（かご島県）です。 （かご島県）を選んだ理由は、九州地方のはしで形もおもしろい形で、調べてみたくなったからです。 です。
なか1	都道府県の位置・形	○日本のどこにあるか書こう。（日本の中での位置、周りの県、思った形など）	地図帳（17）ページを開けてください。 （かご島県）は、大隅半島と薩摩半島がしゃもじのかたのように見えます。地図帳7ページを開けてください。宮崎県とくま本県にかご島県は面しています。かご島は九州の一番南にあります。
なか2	都道府県のみりょくや・特色	○どのようなところか書こう。 ↓↓↓ ① 面積・人口・主な市町村 ② 地形（自然の様子） ③ 産業 ④ れきし・文化・生活 などなど	地図帳（67）ページを開けてください。かご島の昔の国は薩摩と、大隅に分かれています。これは、わたしの予想ですが昔の国のなごりで薩摩半島と大隅半島という名前があるのかなと思いました。
なか3			地図帳（69）ページを開けてください。 人口は、175万2人です。また、農業人口が日本で2番目です。また、面積は9188km²です。 地図帳17ページを開けてください。かご島県はぶたや、にわとり、肉牛のしゅが多いようです。
なか4		○①から④のなかから選んで書きましょう。 ○もっと書ける子は、うらを使って書いてもOK	地図帳（9）ページを開けて下さい 「おくにじまん」に「かつお節の生産量が日本一」と書いてあります。
まとめ	自分の考え	○都道府県を調べて、考えたことや思ったこと、わかったことを書こう。	（かご島県）を調べて、昔の国と、半島に関係があるのかな？になったのでまたさらに調べてみたいと思いました。

（資料１５）

◎ スピーチ活動を通した成果

以下、4月からのスピーチ活動を通した子どもの変容をまとめる。

- 友達の良さをみつけるきっかけができた。
- 社会科への興味関心を持った。
- 授業の中で意見をいう子が増えた。
- 普段のリレースピーチの際も自分からノートやメモ用紙に書いてくるようになった。
- 外国籍の子は始めスピーチを嫌がっていたが次第に自らメモ用紙に書いてきてスピーチを行うようになった。
- 友達の話を友達の方を向いて聞くようになり、姿勢・態度が良くなった。
- 給食後や放課等に地図帳を開き、地域の名前を友達同士で地名を調べるクイズを行うグループや地域の事を調べる子、外国の国名前を見たりする子が増えた。

◎ スピーチ活動を通した課題

「友達スケッチ」を行って、仲間に興味・関心を持ち、仲間の良さを見つけ、自分とは違うよさを共感することはできたと思われる。しかし、スケッチする子が重なることがあり、一部の子の良さしか感じることができず、どの子にも自分の良さを実感させることができなかった。

Ⅳ 今後、教師として大切にしたいこと

1年間、A小学校にて同じ子どもたちを見させていただき、子どもの成長する姿を目の当たりにした。子どもはまだ成長の途中であり、これからも多くの人と出会い、色々な影響を受けながら成長していく。その成長の過程に自分が関わることができるという喜びを感じながら、支援する気持ちを常に持ち、指導していきたい。

私は、子どもにきっかけを与える教師になりたい。子どもは誰もが一人ひとり、きらっと輝くものを持っている。本を読むのが好きで図書室に毎日本をかりに行く子、音楽が大好きでピアノをひく子、電車が好きで駅の名前を得意げにいう子、運動が好きでサッカーをしに行く子。友達とつながるということは友達の良さを自分の糧として成長させる大切な絆である。私は、子どもの興味を引き出し、知ることや学ぶことが楽しいと感じられるきっかけを与えていきたい。

学級には発達障害をもつ子、国籍の違う子、勉強やスポーツに長けている子など様々な個性をもつ子どもが一緒になって生活する。自分とは違う仲間の性質を見つけた時に、「違い」に目を向け排除するのではなく、「良さ」に目を向け、互いの良さを認め合い、共感してつながりあえる子どもを育んでいきたい。

実習を通して、学級づくりだけでなく授業をとおして学習集団の力を高めていくことが大切だと学んだ。学級集団の質を向上していくためには、特に学習規律が重要だと感じた。学習規律づくりには、教師から、友達からの「ほめる、認める」という友達の良さや自分の良さに気づき、共感し、安心して学習に参加できる学習集団の土台をつくりたいと考える。

最後に、私自身、まだまだ立派な人間であるとはとても言えない。人として教師として常に向上心を持ち、謙虚な姿勢で学ぶことを忘れず、子どもとともに成長し続けていきたい。

【付記】

最後になりましたが、連携協力校の校長先生、ご指導頂いた先生方、お忙しい中、大変お世話になりました。温かいご指導をいただき、心から感謝を申し上げます。

【主な参考文献】

- 志賀廣夫『できる教師の１０の技』(ルック・2009年)
- 中妻雅彦『スピーチ活動でどの子ものびる』(ふきのとう書房・2003年)

---

i 中央教育審議会答申「第２章 青少年の意欲をめぐる現状と課題」(平成19年1月)

ii 東京都教職員センター「自尊感情や自己肯定感に関する研究」(平成20年11月から12月)

iii (財) 日本青少年研究所「高校生の心と体の健康に関する調査」(2011年２月発表)

iv 山田暁生『学級づくりと「学級通信」活動』(明治図書)